

2016年11月12日

東藝術倶楽部江戸勉強会

江戸日本橋編

【日本橋】

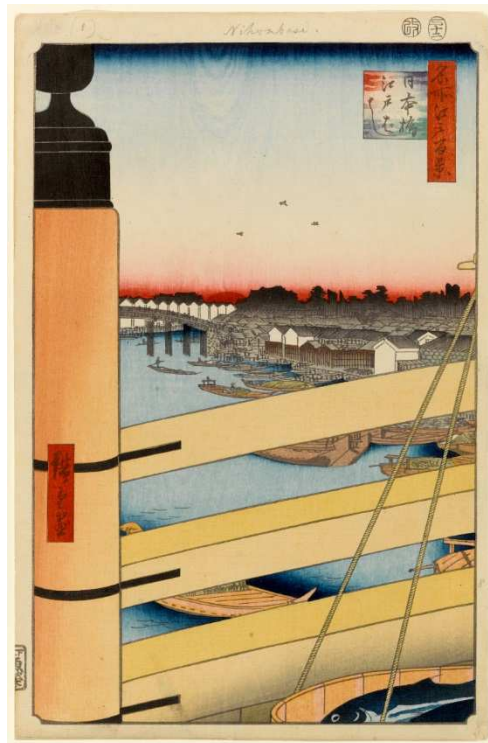
東京都中央区の日本橋川に架かる国道の橋で、日本の道路元標、日本の道路網の始点。ここを起点とする国道は、1号（→大阪市梅田新道）、4号（→青森市青い森公園前）、6号（→仙台市苦竹 IC）、14号（→千葉市広小路交差点）、15号（→横浜市青木通交差点）、17号（→新潟市本町交差点）、20号（→長野県塩尻市高出交差点）の7本。



現在の石造二連のアーチ橋は19代目もしくは20代目とされ、明治44年(1911年)完成の国の重要文化財。明治36年(1903年)の市区改正計画により、幅6間以上の橋梁は鉄橋もしくは石橋を架設することになり、明治5年築の木造の橋は取り壊され、現在の橋になった。橋の長さ49m、幅27m、設計は米本晋一で、橋柱の銘板にある「日本橋」の揮毫(揮毫:きごう)は徳川慶喜のもの。

初代の橋(木造の太鼓橋)は、徳川家康の全国道路網整備計画に際し1603年(慶長8年)に架けられた公儀橋(ごうぎばし)で、北側部分を原寸で復元したものが江戸東京博物館に展示されている。1604年(慶長9年)に五街道の基点となる。1618年(元和4年)に最初の大改架、『慶長見聞集』に長さ三十七間四尺五寸(約68メートル)、幅四間二尺五寸(約8メートル)との記載あり。明暦の大火(1657年)により全焼。江戸は火事が多く、日本橋は江戸幕府開府から幕末に至るまでの間に幾度も焼け落ちている。明治維新までに合わせて10回(全焼8回、半焼2回)を数えた。1872年(明治5年)に木造最後となる改架。費用は日本橋魚河岸の魚問屋組合が負担した。

現在の日本橋を中心とした地域は、古くは武蔵国豊嶋郡江戸郷前嶋村と呼ばれる地域。江戸は、鎌倉時代は江戸氏から太田道灌、さらに後北条氏を経て徳川家康が幕府を開く間に、早くも町地として開発された。日本橋が架けられ交通の起点として定められてからは、越後屋（三越の前身）をはじめとする大店が集まり、付近には金座（江戸本石町）、銀座（江戸銀座）が置かれるなど、江戸を代表する場所として賑わった。



【魚河岸】

江戸時代初期、徳川家康が大坂の佃村から漁師を呼び寄せ、江戸湾内で漁業の特権を与えて獲れた魚を幕府に納めていた。幕府に納めていた魚の残りを、日本橋界隈で売ることになったのが、魚河岸の始まりと言われている〔開設は慶長年間（1596～1615）〕。それ以前にも地元の漁師が魚を売っていたが、一カ所に集めて問屋を通して売るといったシステムにしたのがこの魚河岸。

明暦の大火（1657年）でいったん焼失、その後復興後に本格的な市場が、日本橋から江戸橋にかけて日本橋川の河岸地域に展開。北岸（三越側）の本船町、長浜町、安針町、本小田原町などが鮮魚を扱う「日本橋魚河岸」と呼ばれた地域。南側（高島屋側）の四日市町には塩魚や干物を扱う「四日市河岸」、また本材木町の楓川（もみじがわ）沿いには延宝2年（1674年）に開かれた「新場」という魚市場があった。



日本橋以外にも、芝・金杉浜町の海岸に「雑魚場」という小さな市があり、もっぱら庶民向けの小魚を扱っていた。この他にも深川蛤町には貝専門の市場があった。

この「河岸」という言葉は、本来、川や堀で船への荷物の積み下ろしをする場所を指し、日本橋周辺だけで22カ所あったと言われ、その場所の地名や荷揚げする品物から、それぞれの呼び名がついていた。魚河岸は、魚を取り扱うことから魚河岸の名がつけられ、それがまた魚市場を表す言葉にも使われるようになった。

江戸時代の市場には競りはなく、漁師は獲った魚を地元の魚問屋に納め、その問屋がまとめて船で日本橋に運び、日ごろから契約してある魚市場の問屋に渡し、その問屋が配下の仲買に売り、仲買が小売の魚屋に売るといったシステムになっていた。事前に魚の価格は決まっておき、競りをする必要はなかった。

江戸時代の魚市場の最大の問題は、何と言っても「鮮度」。冷凍どころか冷蔵の設備もないため、魚は時間の経過とともに鮮度はどんどん落ちていく。人口が増加した江戸では、江戸前だけでは足りず、房総、鹿島灘、相模湾、伊豆な

どで獲れた魚も日本橋に入ってきた。

内房総、相模湾、伊豆方面は「押送船（おしおくりぶね）」という帆と櫓を併用した快速船で運び、風があった場合でも、房総半島先端部の館山から10時間かかっていたと言われ、特に真夏には魚の傷みが心配された。更に遠い鹿島灘や九十九里浜の魚は、銚子から底の平らな「まな船」で利根川を遡り、木下か布佐で馬に積み替えて行徳、松戸に送り、そこから再び船に積んで運んでいた。その間の所要時間は30時間以上、昼間に水揚げされた魚が江戸の食卓に上るまでには、どんなに早くとも3日目の昼になった。こうなると真夏でなくとも鮮魚の鮮度はかなり落ちる。このため、市場では少しでも活きのよい魚を仕入れて売りたいという魚屋の駆け引きがそこで行われ、活気に満ち溢れることになった。



そこで、何とか活きのよい魚をそのまま運ぶ方法はないかと考えたのが、生簀（いけす）と生け船。漁で獲った魚を出荷までの間、生簀に入れて、運ぶ時は海水の入った箱に入れて、日本橋まで生きてまま運んだ。生簀があれば、出荷時期や出荷量の調整もでき、市場の安定にもつながる。とはいえ、活きのよい魚が庶民の食卓に上ることは珍しかったが、それでも特別な日などには、刺身なんかも食べていたようだ。

「朝昼晩三千両の落ちどころ」という川柳がある。江戸では1日に三千両のおカネが流れていた。「なんの千両は朝のうち」ということで、そのうち朝の千両は朝の魚河岸で動き、昼の千両は芝居町（江戸三座）、夜の千両は吉原でそれぞれ動いたと言われるほど。魚河岸が活況に満ちていた証。

【浮世絵版元】

娯楽出版物を扱う地本問屋（じほんといや）が浮世絵の版元となった。主な版元は以下の通り。

- ◇ 伊賀屋勘右衛門：懐月堂度繁などの作品を出版
- ◇ 鶴屋喜右衛門（鶴屋）：老舗の一つで、「東海道五十三次」を途中まで出版
- ◇ 奥村屋政信（鶴寿堂）
- ◇ 和泉屋市兵衛（甘泉堂・泉市）：天明～明治初期の代表的版元で、歌麿、広重、国貞などの作品を手がける。
- ◇ 西村屋与八：「富嶽三十六景」など北斎の作品を多く手掛ける。
- ◇ 蔦屋重三郎：歌麿、写楽らを輩出
- ◇ 丸屋甚八
- ◇ 三河屋利兵衛
- ◇ 山口屋藤兵衛
- ◇ **伊場屋仙三郎/伊場屋久兵衛（伊場仙/伊場久）**：東海道張交図絵（歌川広重）。元は幕府御用の和紙・竹製品店で、風刺絵や役者絵禁止令が出された後も「落書き」と称して役者絵を出版。団扇絵を多く手掛け、現在は日本橋で団扇、扇子の製造販売を営む。〔詳細は後述〕
- ◇ 有田屋清右衛門：「東海道五十三次有田屋版」（歌川広重）
- ◇ 伊勢屋利兵衛：「東海道五十三次絵本駅路鈴」（葛飾北斎）
- ◇ 魚屋栄吉（魚栄）
- ◇ 上村与兵衛（上ヨ / 上村）：後発の新興版元。22歳の歌川国政を抜擢し、鮮烈なデビューを飾らせた。
- ◇ 加賀屋吉兵衛
- ◇ 亀屋岩吉
- ◇ 川口屋正蔵
- ◇ 蔦屋吉蔵：「東海道五十三驛之図」、「東海道・蔦屋版」（歌川広重）
- ◇ 西村屋祐蔵：「富嶽百景」（葛飾北斎）
- ◇ 藤岡屋彦太郎/藤岡屋慶次郎：「東海道風景図会」（歌川広重・文：柳下亭種員）

【伊場屋仙三郎/伊場屋久兵衛（伊場仙/伊場久）】

江戸時代の浮世絵の版元。現在は日本橋小舟町で団扇、扇子を製造、販売。公称では、創業は天正18年（1590年）となっているが、これは創業者伊場屋勘左衛門の生年のため、実際には分からない。

勘左衛門の父親は三河国岡崎城下で松平家の土木工事に従事、浜松城への移封に伴い遠江国敷知郡伊場村（現在の浜松市中区）に移住、その後家康に従って天正18年に江戸入りし、江戸堀江町（現在の日本橋小舟町）に店を構える。創業当初は和紙と竹を販売、元禄期（1688～1704年）にそれらを材料に団扇、扇子を製造販売。堀江町は東堀留川（東堀留川は西堀留川とともに東京都中央区に存在した河川で、日本橋川から北側に入り込む入堀であった）に隣接していたことから、上方など他国から仕入れた物資を扱う業者が集積。江戸後期に団扇河岸が生まれ、団扇絵が流行。

伊場屋は堀江一丁目に仙三郎店（団扇堂、団仙堂）、同二丁目に久兵衛店（錦政堂）があり、歌川豊国、歌川広重、歌川国芳等歌川派の団扇絵や一枚摺りの錦絵を手掛ける。10代目仙三郎の時に「伊場仙」と称した。安政2年（1855年）の安政江戸地震で後継者が犠牲となった。



明治に入り浮世絵が衰退すると、13代目吉田直吉が歴表（カレンダー）事業を開始。現在は14代目吉田誠男（よしだのぶお）が取締役、歴表事業は廃止し、今は団扇、扇子の製造販売に専念。

伊場仙から出版された主な浮世絵は以下の通り。

- ◇ 歌川広重：「東都名所雪の三景 両国雪晴の月」、「東海道五十三對 府中」（伊場久）
- ◇ 歌川国芳：「東海道五十三對日坂」、「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」、「荷宝蔵壁のむだ書」、「夕寿豆美」（伊場久）



【刷毛の「江戸屋」】

初代利兵衛は7代将軍家綱の時代に、将軍家のお抱え「刷毛師」であった。享保3年（1718年）に将軍家から「江戸屋」の称号を与えられ、日本橋大伝馬町に店を構えた。

享保17年（1732年）の「万金産業袋」には「江戸刷毛」の記述があり、現在では7種類が指定されている。経師刷毛（表具の糊用）、染色刷毛（織物用）、人形刷毛、漆刷毛、木版刷毛（木版画用）、白粉刷毛（化粧用）、塗装刷毛であり、ムラ塗りが出ず、腰があるのが良い刷毛とされている。刷毛の素材は人毛、獣毛（馬、鹿、山羊等）、植物繊維（ツグ、シュロ等）。



【浮世絵の技法「ぼかし摺」】

濃い色から薄い色へと次第にぼかしていく技法。特に海や空などを描写する風景画で多用された。「ぼかし摺」には、「板ぼかし」、「拭きぼかし」、「当てなしぼかし」、「吹きぼかし」などの技法がある。

「板ぼかし」は、ぼかす部分のみ版木の彫の角を落とし、木賊（トクサ）や棕の葉を使用して磨いて版面に傾斜をつけて摺る技法。ガサツとした独特のぼかし効果が得られ、うねるような土坡の表現に用いられる。

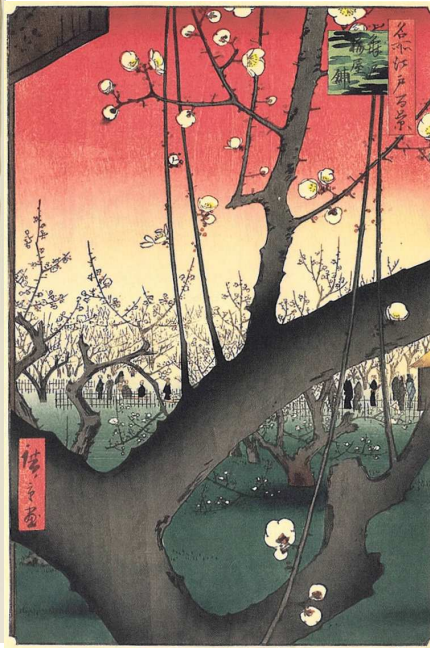
「拭きぼかし」は、ぼかしたい部分の版木をぬれ雑巾で拭き、その上を刷毛で絵具をはいて摺る技法。水に絵具が広がって紙にぼかしの効果が表れる。中でも水平で真っ直ぐなぼかしを「一文字ぼかし」と呼び、画面の最上部の一文字ぼかしを「天ぼかし」という。

「あてなしぼかし」は、ぼかす部分の版木に水を垂らし、そこに絵具を含ませて摺る技法。当てがなく偶然の形に滲んで、顔料の自然な広がり任せたぼかしが生じる。

「吹きぼかし」は、型紙をあてて霧吹きのような道具で絵の具を吹き付けてぼかす技法。



歌川広重『名所江戸百景』
「日本橋雪晴」



歌川広重『名所江戸百景』
「亀戸梅屋敷」



歌川広重『名所江戸百景』
「千駄木団子坂花屋敷」



歌川広重『名所江戸百景』
「隅田河橋場の渡かわら竈」

安政3年（1856年）～安政5年（1858年）

【どら焼きの「清寿軒」】

「どら焼き」の形状が中国の楽器「銅鑼」に似ているからその名が付けられたとの説がある。

「清寿軒」は、文久元年（1861年）に初代店主澤村清造が日本橋堀江町（現在の小舟町）で創業。現在の店は日本橋堀留町、店主は7代目日向野政治。

【親子丼の「玉ひで」】

宝暦10年（1760年）、初代山田鐵右衛門が妻のたまと一緒に御鷹匠仕事の店「玉鐵」を江戸日本橋和泉町（現在の人形町三丁目）に開店。その後、軍鶏料理専門店になる。

明治20年（1887年）頃、客が軍鶏鍋烏鍋（烏寿喜）のメに卵でとじてご飯と一緒に食べる「親子煮」が食べられていたのを見て、明治24年（1891年）に5代目店主秀吉の妻山田とくが、食べやすいようにご飯にかけて「親子丼」を一品料理として提供するようになった。「玉鐵」が「玉ひで」となったのはこの頃。

当初「汁かけ飯」は店の格が落ちるとして、昭和54年（1979年）まで店内では提供せず、出前のみで対応していた。この親子丼は旧魚河岸の人たちには人気があったという。

現在の店主は8代目山田耕之亮。

【人形焼きの「重盛永信堂」】

人形焼き「重盛永信堂」は明治23年（1890年）信州生まれの重盛永治が、大正6年に（1917年）人形町通りに創業した。重盛は明治38年（1905年）に信州伊那から上京、大正4年（1915年）に京橋柳町（現在の京橋3丁目）に独立、大正6年に創業後、昭和元年に（1926年）現在地に移転。平成27年（2015年）に重盛行雄が4代目に就任。

人形焼きは、人形町には重盛永信堂のほかに「人形焼き本舗板倉屋」、浅草仲見世通りに「元祖木村屋」、錦糸町に「人形焼き山田家」などがある。

【元吉原と「末廣神社」】

「末廣神社」は、中央区日本橋人形町にある神社で、江戸時代初期に吉原（当初は「葦原」）がこの地にあった当時〔元和3年（1617年）～明暦3年（1657年）〕、その地主神、産土神として信仰されていた。明暦の大火後、吉原が新吉原に移転してからは、その跡地の難波町、住吉町、高砂町、新泉町の4カ所の氏神として信仰された。日本橋七福神の毘沙門天。

祭神は宇賀之美多摩命〔ウカノミタマノミコト：穀物の神（女神）、伏見稻荷大社の主祭神で、稲荷神（お稲荷さん）として広く信仰〕、武甕槌命〔タケミカ

ヅチノミコト：日本神話で伊弉諾尊(イザナギノミコト)が火神(カグツチ)を切り殺したとき、剣に付着した血から化生した神。経津主神(フツヌシノカミ)とともに、葦原の中つ国に派遣され、大国主神(オオクニヌシノカミ)との間で国譲りの交渉に成功。また、神武東征においても、天皇の危難を救ったとされる。鹿島神宮の祭神]。

社号の起源は、延宝3年(1675年)社殿修復の際に、年経た中啓(扇)が発見されたので、氏子の人達が悦び祝って「末廣」の二字を冠した。

天正18年(1590年)、徳川家康が東海地方から多数の家臣団を率いて江戸に入府、慶長8年(1603年)に江戸幕府を開くと、江戸の整備を急ピッチで進めるため関東一円から人足を集め、また、職にあぶれた浪人も仕事を求めて江戸に集まってきた。このため、江戸の男女比は圧倒的に男性が多く、このような時代背景の下、江戸市中各所に遊女屋が営業を始めるようになった。

江戸幕府は江戸城大普請、武家屋敷の整備などを進めたため、庶民は移転を強制されることが多く、なかでも遊女屋は頻繁に移転を求められた。そのあまりの多さに辟易した遊女屋は遊廓の設置を陳情。慶長17年(1612年)に庄司甚右衛門(元は駿府の娼家の主人)が代表となり、①客を一晩のみ泊め連泊させない、②偽られて売られてきた娘は調査して親元に返す、③犯罪者などは届け出る、という3条件で陳情した結果、受理された。陳情から5年後の元和3年(1617年)、甚右衛門を惣名主として江戸初の遊廓「葦原」が誕生した。このとき幕府が提供した土地は現在の日本橋人形町にある当時の海岸に近い「葦屋町」と呼ばれる2丁(約220メートル)四方の区画で、葦の茂る僻地であったことから「吉原」の名が付けられた。

明暦3年(1657年)の「明暦の大火」後、吉原遊廓は浅草寺裏の日本堤に移転し、移転前の吉原を「元吉原」、移転後の吉原を「新吉原」と呼んだ。



【歌舞伎役者と「三光稲荷神社」】

三光稲荷神社は、当地付近（旧長谷川町）に居住した絹布問屋田原屋村越庄左衛門、木綿問屋建石三蔵の両家が慶長8年（1603年）に勧請したという説と、中村座に出演していた大阪の歌舞伎役者「二代目関三十郎（1786～1839年）」が元禄2年（1689）以前に伏見より勧請したという説がある。大正13年の区画整理で当社のある旧長谷川町と旧田所町が合併して現在の堀留町2丁目になり、旧田所町の田所大明神もこの三光稲荷神社に奉祀されたといわれる。拝殿右上の額「日本橋区長谷川町守護神三光稲荷神社」は神田神社宮司平田盛胤氏の揮毫とのこと。

ある時、堺町の中村座で関三十郎が演技をしていると、場内で靈光のような閃きがあり、三十郎がくっきりと照らし出された。それはあたかも三十郎の芸が光を発しているように見えたため、観客からやんやの喝采を浴び大評判となり、これ以降、三十郎の名声は不動のものとなった。

三十郎は、これは日頃から深く信仰していた伏見稲荷大明神の加護によるものと感じ、自身の名の「三」と「光」の字を合わせて「三光稲荷」と称したという。

二代目関三十郎は、天明6年（1786年）生まれの江戸時代後期の歌舞伎役者で、享和元年（1801年）に三代目中村歌右衛門に入門、中村歌助と改名。その後初代関三十郎の養子となり二代目を襲名した。小柄ながら姿がよく、地芸・所作にすぐれ、和実を得意とした。堅い芸風で鬘貞も多く「名人関三」と称された。また、踊りの名手で、「藤娘」を初めて舞ったのは、三十郎だったといわれている。



歌川豊国（初代）

「二代目関三十郎の七変化之内朱しやうき」
文政10年（1827年）

中村座に出演していた関三十郎が伏見より勧請したという説について、「江戸惣鹿子」〔元禄2年（1689）〕にはこの神社に関する記載「はせ川町、三十郎稲荷」があることから、神社自体は関三十郎の生年以前にあったと推測される。近隣には吉原や歌舞伎小屋の中村座、市村座、更には操り人形や人形浄瑠璃の小屋等があり、それを背景とした江戸落語に「三光新道」や「三光神社」が登場する。

古くから娘、子供、芸妓等の参詣するものが多く、特に猫を見失ったとき立願すれば霊験ありといわれる。「三光稲荷神社参道」と銘ある石碑や境内にある猫の置物は猫が無事に帰ったお礼に建立、奉納された。



佐々木印

駿河町

木屋

四十二丁目

本町

本町

御倉

神茂

山本海苔

安針町

品川町

高砂新道

安針町

安針町

品川町表河岸

本船町

本郷町

品川町

品川町裏河岸

品川町

魚河岸

芝河岸

中河岸

地引河岸 高原河岸

蔵

品川町裏河岸

日本橋

品川町西河岸

蔵

木更津河岸

蔵屋敷

土手蔵

土手蔵

江戸橋蔵屋敷

栄大橋

高札

蔵地

御倉

稲鹿荷兒島

近江屋

元椽原

四日市町

蔵地

江戸橋

高蔵

翁稻荷

四十二丁目

江戸時代年号表

紀元	西暦	和暦	干支	江戸暦	天皇		将軍		暦法	
					代	名	代	名		
2246	1586	天正 14	丙戌		107	後陽成			宣明暦	
2247	1587	天正 15	丁亥							
2248	1588	天正 16	戊子							
2249	1589	天正 17	己丑							
2250	1590	天正 18	庚寅							
2251	1591	天正 19	辛卯							
2252	1592	文禄 01	壬辰							
2253	1593	文禄 02	癸巳							
2254	1594	文禄 03	甲午							
2255	1595	文禄 04	乙未							
2256	1596	慶長 01	丙申							
2257	1597	慶長 02	丁酉							
2258	1598	慶長 03	戊戌							
2259	1599	慶長 04	己亥							
2260	1600	慶長 05	庚子							
2261	1601	慶長 06	辛丑							
2262	1602	慶長 07	壬寅							
2263	1603	慶長 08	癸卯	江戸 001			1	家康		
2264	1604	慶長 09	甲辰	江戸 002			2	秀忠		
2265	1605	慶長 10	乙巳	江戸 003						
2266	1606	慶長 11	丙午	江戸 004						
2267	1607	慶長 12	丁未	江戸 005						
2268	1608	慶長 13	戊申	江戸 006						
2269	1609	慶長 14	己酉	江戸 007						
2270	1610	慶長 15	庚戌	江戸 008						
2271	1611	慶長 16	辛亥	江戸 009	108	後水尾				
2272	1612	慶長 17	壬子	江戸 010						
2273	1613	慶長 18	癸丑	江戸 011						
2274	1614	慶長 19	甲寅	江戸 012						
2275	1615	元和 01	乙卯	江戸 013						
2276	1616	元和 02	丙辰	江戸 014						
2277	1617	元和 03	丁巳	江戸 015						
2278	1618	元和 04	戊午	江戸 016						
2279	1619	元和 05	己未	江戸 017						
2280	1620	元和 06	庚申	江戸 018						
2281	1621	元和 07	辛酉	江戸 019						
2282	1622	元和 08	壬戌	江戸 020						
2283	1623	元和 09	癸亥	江戸 021			3	家光		
2284	1624	寛永 01	甲子	江戸 022						
2285	1625	寛永 02	乙丑	江戸 023						
2286	1626	寛永 03	丙寅	江戸 024						
2287	1627	寛永 04	丁卯	江戸 025						
2288	1628	寛永 05	戊辰	江戸 026						
2289	1629	寛永 06	己巳	江戸 027	109	明正				
2290	1630	寛永 07	庚午	江戸 028						
2291	1631	寛永 08	辛未	江戸 029						
2292	1632	寛永 09	壬申	江戸 030						
2293	1633	寛永 10	癸酉	江戸 031						
2294	1634	寛永 11	甲戌	江戸 032						
2295	1635	寛永 12	乙亥	江戸 033						
2296	1636	寛永 13	丙子	江戸 034						
2297	1637	寛永 14	丁丑	江戸 035						
2298	1638	寛永 15	戊寅	江戸 036						
2299	1639	寛永 16	己卯	江戸 037						
2300	1640	寛永 17	庚辰	江戸 038						
2301	1641	寛永 18	辛巳	江戸 039						
2302	1642	寛永 19	壬午	江戸 040						
2303	1643	寛永 20	癸未	江戸 041	110	後光明				
2304	1644	正保 01	甲申	江戸 042						
2305	1645	正保 02	乙酉	江戸 043						
2306	1646	正保 03	丙戌	江戸 044						
2307	1647	正保 04	丁亥	江戸 045						
2308	1648	慶安 01	戊子	江戸 046						
2309	1649	慶安 02	己丑	江戸 047						
2310	1650	慶安 03	庚寅	江戸 048						
2311	1651	慶安 04	辛卯	江戸 049			4	家綱		
2312	1652	承応 01	壬辰	江戸 050						
2313	1653	承応 02	癸巳	江戸 051						
2314	1654	承応 03	甲午	江戸 052	111	後西				
2315	1655	明暦 01	乙未	江戸 053						

2389	1729	享保 14	己酉	江戸 127	115	桜町		
2390	1730	享保 15	庚戌	江戸 128				
2391	1731	享保 16	辛亥	江戸 129				
2392	1732	享保 17	壬子	江戸 130				
2393	1733	享保 18	癸丑	江戸 131				
2394	1734	享保 19	甲寅	江戸 132				
2395	1735	享保 20	乙卯	江戸 133				
2396	1736	元文 01	丙辰	江戸 134				
2397	1737	元文 02	丁巳	江戸 135				
2398	1738	元文 03	戊午	江戸 136				
2399	1739	元文 04	己未	江戸 137				
2400	1740	元文 05	庚申	江戸 138				
2401	1741	寛保 01	辛酉	江戸 139				
2402	1742	寛保 02	壬戌	江戸 140				
2403	1743	寛保 03	癸亥	江戸 141				
2404	1744	延享 01	甲子	江戸 142				
2405	1745	延享 02	乙丑	江戸 143				
2406	1746	延享 03	丙寅	江戸 144				
2407	1747	延享 04	丁卯	江戸 145				
2408	1748	寛延 01	戊辰	江戸 146				
2409	1749	寛延 02	己巳	江戸 147				
2410	1750	寛延 03	庚午	江戸 148				
2411	1751	宝暦 01	辛未	江戸 149				
2412	1752	宝暦 02	壬申	江戸 150				
2413	1753	宝暦 03	癸酉	江戸 151				
2414	1754	宝暦 04	甲戌	江戸 152				
2415	1755	宝暦 05	乙亥	江戸 153				
2416	1756	宝暦 06	丙子	江戸 154				
2417	1757	宝暦 07	丁丑	江戸 155				
2418	1758	宝暦 08	戊寅	江戸 156				
2419	1759	宝暦 09	己卯	江戸 157				
2420	1760	宝暦 10	庚辰	江戸 158				
2421	1761	宝暦 11	辛巳	江戸 159				
2422	1762	宝暦 12	壬午	江戸 160				
2423	1763	宝暦 13	癸未	江戸 161				
2424	1764	明和 01	甲申	江戸 162				
2425	1765	明和 02	乙酉	江戸 163				
2426	1766	明和 03	丙戌	江戸 164				
2427	1767	明和 04	丁亥	江戸 165				
2428	1768	明和 05	戊子	江戸 166				
2429	1769	明和 06	己丑	江戸 167				
2430	1770	明和 07	庚寅	江戸 168				
2431	1771	明和 08	辛卯	江戸 169				
2432	1772	安永 01	壬辰	江戸 170				
2433	1773	安永 02	癸巳	江戸 171				
2434	1774	安永 03	甲午	江戸 172				
2435	1775	安永 04	乙未	江戸 173				
2436	1776	安永 05	丙申	江戸 174				
2437	1777	安永 06	丁酉	江戸 175				
2438	1778	安永 07	戊戌	江戸 176				
2439	1779	安永 08	己亥	江戸 177				
2440	1780	安永 09	庚子	江戸 178				
2441	1781	天明 01	辛丑	江戸 179				
2442	1782	天明 02	壬寅	江戸 180				
2443	1783	天明 03	癸卯	江戸 181				
2444	1784	天明 04	甲辰	江戸 182				
2445	1785	天明 05	乙巳	江戸 183				
2446	1786	天明 06	丙午	江戸 184				
2447	1787	天明 07	丁未	江戸 185				
2448	1788	天明 08	戊申	江戸 186				
2449	1789	寛政 01	己酉	江戸 187				
2450	1790	寛政 02	庚戌	江戸 188				
2451	1791	寛政 03	辛亥	江戸 189				
2452	1792	寛政 04	壬子	江戸 190				
2453	1793	寛政 05	癸丑	江戸 191				
2454	1794	寛政 06	甲寅	江戸 192				
2455	1795	寛政 07	乙卯	江戸 193				
2456	1796	寛政 08	丙辰	江戸 194				
2457	1797	寛政 09	丁巳	江戸 195				
2458	1798	寛政 10	戊午	江戸 196				
2459	1799	寛政 11	己未	江戸 197				
2460	1800	寛政 12	庚申	江戸 198				
2461	1801	享和 01	辛酉	江戸 199				
					9	家重	宝暦曆	
					10	家治		
					11	家斉		寛政曆

2462	1802	享和 02	壬戌	江戸 200			
2463	1803	享和 03	癸亥	江戸 201			
2464	1804	文化 01	甲子	江戸 202			
2465	1805	文化 02	乙丑	江戸 203			
2466	1806	文化 03	丙寅	江戸 204			
2467	1807	文化 04	丁卯	江戸 205			
2468	1808	文化 05	戊辰	江戸 206			
2469	1809	文化 06	己巳	江戸 207			
2470	1810	文化 07	庚午	江戸 208			
2471	1811	文化 08	辛未	江戸 209			
2472	1812	文化 09	壬申	江戸 210			
2473	1813	文化 10	癸酉	江戸 211			
2474	1814	文化 11	甲戌	江戸 212			
2475	1815	文化 12	乙亥	江戸 213			
2476	1816	文化 13	丙子	江戸 214			
2477	1817	文化 14	丁丑	江戸 215	120	仁孝	
2478	1818	文政 01	戊寅	江戸 216			
2479	1819	文政 02	己卯	江戸 217			
2480	1820	文政 03	庚辰	江戸 218			
2481	1821	文政 04	辛巳	江戸 219			
2482	1822	文政 05	壬午	江戸 220			
2483	1823	文政 06	癸未	江戸 221			
2484	1824	文政 07	甲申	江戸 222			
2485	1825	文政 08	乙酉	江戸 223			
2486	1826	文政 09	丙戌	江戸 224			
2487	1827	文政 10	丁亥	江戸 225			
2488	1828	文政 11	戊子	江戸 226			
2489	1829	文政 12	己丑	江戸 227			
2490	1830	天保 01	庚寅	江戸 228			
2491	1831	天保 02	辛卯	江戸 229			
2492	1832	天保 03	壬辰	江戸 230			
2493	1833	天保 04	癸巳	江戸 231			
2494	1834	天保 05	甲午	江戸 232			
2495	1835	天保 06	乙未	江戸 233			
2496	1836	天保 07	丙申	江戸 234			
2497	1837	天保 08	丁酉	江戸 235		12	家慶
2498	1838	天保 09	戊戌	江戸 236			
2499	1839	天保 10	己亥	江戸 237			
2500	1840	天保 11	庚子	江戸 238			
2501	1841	天保 12	辛丑	江戸 239			
2502	1842	天保 13	壬寅	江戸 240			
2503	1843	天保 14	癸卯	江戸 241			
2504	1844	弘化 01	甲辰	江戸 242			
2505	1845	弘化 02	乙巳	江戸 243			
2506	1846	弘化 03	丙午	江戸 244	121	孝明	
2507	1847	弘化 04	丁未	江戸 245			
2508	1848	嘉永 01	戊申	江戸 246			
2509	1849	嘉永 02	己酉	江戸 247			
2510	1850	嘉永 03	庚戌	江戸 248			
2511	1851	嘉永 04	辛亥	江戸 249			
2512	1852	嘉永 05	壬子	江戸 250			
2513	1853	嘉永 06	癸丑	江戸 251		13	家定
2514	1854	安政 01	甲寅	江戸 252			
2515	1855	安政 02	乙卯	江戸 253			
2516	1856	安政 03	丙辰	江戸 254			
2517	1857	安政 04	丁巳	江戸 255			
2518	1858	安政 05	戊午	江戸 256		14	家茂
2519	1859	安政 06	己未	江戸 257			
2520	1860	万延 01	庚申	江戸 258			
2521	1861	文久 01	辛酉	江戸 259			
2522	1862	文久 02	壬戌	江戸 260			
2523	1863	文久 03	癸亥	江戸 261			
2524	1864	元治 01	甲子	江戸 262			
2525	1865	慶応 01	乙丑	江戸 263			
2526	1866	慶応 02	丙寅	江戸 264		15	慶喜
2527	1867	慶応 03	丁卯	江戸 265	122	明治	
2528	1868	明治 01	戊辰				
2529	1869	明治 02	己巳				
2530	1870	明治 03	庚午				
2531	1871	明治 04	辛未				
2532	1872	明治 05	壬申				
2533	1873	明治 06	癸酉				グレゴリオ暦

江戸暦は、家康が江戸に幕府を開いた慶長八年を「江戸元年」としたものです。